

2018年度 第31回ミュージック・ペンクラブ音楽賞決定！！

《クラシック》

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 独奏・独唱部門 | 佐藤俊介（ヴァイオリン） |
| 2. 室内楽・合唱部門 | 新国立劇場合唱団 |
| 3. オペラ・オーケストラ部門 | 公益財団法人 NHK交響楽団 |
| 4. 現代音楽部門 | 細川俊夫 オペラ「松風」（新国立劇場） |
| 5. 研究・評論部門 | 礒山雅（研究・評論/バッハ研究） |
| 6. 功労賞 | 岡山潔（ヴァイオリン） |

《ポピュラー》

- | | |
|--------------|--------------------------------------------------|
| 1. 最優秀作品賞部門 | 宇多田ヒカル 初恋 |
| 2. イベント企画賞部門 | 内田裕也プロデュース
46th New Years World Rock Festival |
| 3. 新人賞部門 | 甲田まひる |
| 4. 著作出版物賞部門 | 戦後洋楽ポピュラー史 1945～1975
（三井徹著 NTT 出版） |
| 5. 特別賞部門 | 外山喜雄・恵子 |

《オーディオ》

- | | |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 技術開発部門 | テクニクスSL-1000R |
| 2. 優秀録音作品賞部門 | マーラー 交響曲第十番・嬰へ短調（ラッツ校訂版）
ブルックナー交響曲第九番・ニ短調（コールス校訂版）
ジョナサン・ノット指揮 東京交響楽団
エクストン OVCL-00668（国内盤SACD） |
| 3. 功労賞部門 | 菅野沖彦 |

授賞式

2019年4月16日(火)14:00-17:00

文京シビックセンター・スカイホール

〒112-8555 東京都文京区春日1丁目16-2 電話：03-5803-1100

2018年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞に関するお問い合わせは下記までお願いします。

一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパン

〒101-0054千代田区神田錦町3-7-2東京堂錦町ビル7F

MPCJ事務局 080-8051-6652 / mail1@musicpenclub.co

本賞は、少数の選考委員が選ぶ従来型の賞とは異なり、ミュージック・ペンクラブ・ジャパン約160名の全会員による自主投票によって選定されます。授賞対象は、基本的に、日本でその年に公開または発表された音楽界の全プロダクツやイベントです。それは録音録画の形で発売されたものの他、公演、著作、技術開発を含みます。選考基準は、当会の「クラシック」「ポピュラー」「オーディオ」の分野ごとに設けられ、各分野で授賞対象者・団体をノミネートし、最終的に全会員の分野を超えた投票によって決定されます。

2018年第31回ミュージック・ペンクラブ音楽賞授賞者一覧

《クラシック》

独奏・独唱部門賞



(c)Marco Borggreve

佐藤俊介（ヴァイオリン）

佐藤俊介は4歳のとき一家でフィラデルフィアに移住、アメリカの合理的な考え方を徹底して身につけた。10代からモダン（現代仕様の）楽器では大変なヴィルトゥオーゾ（名手）だったが、2010年ころからピリオド（作曲当時の仕様の）楽器、歴史的情報に裏打ちされた演奏法（HIP）に傾倒。瞬く間に腕を上げ、13年からコンチェルト・ケルン、オランダ・バッハ協会（NBS）のコンサートマスターを兼務してきた。2018年6月にはNBSの音楽監督へ昇任。同年11月15日には浜離宮朝日ホールで「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」全6曲を一気に演奏、前後してワーナーが発売した協奏曲集のディスクともども、世界一線のバッハ解釈者の力量を余すところなく示した。（池田 卓夫）

プロフィール

佐藤 俊介

モダン、バロック双方の楽器を弾きこなすヴァイオリニスト。バロック・ヴァイオリン奏者としてはコンチェルト・ケルンのコンサートマスターを務め、クリスティーネ・ショルンスハイム、鈴木秀美、リチャード・エガーらと定期的に演奏している。モダンの分野では日本の主要オーケストラ、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、フランス放送フィルハーモニー、ロシア国立交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団、ナショナル交響楽団などと共演。2010年第17回J.S. バッハ国際コンクールで第2位および聴衆賞受賞。出光音楽賞、S&Rワシントン賞など多数受賞。2013年よりアムステルダム音楽院古楽科教授、2018年よりオランダ・バッハ協会第6代音楽監督に就任。録音も第62回文化庁芸術祭で大賞を受賞した「グリーグ：ヴァイオリン・ソナタ集」、世界で初めてガット弦とバロック・ボウを使った歴史的奏法で録音した「パガニーニ：24のカプリースop.1」など幅広い分野にわたる。2018年「J.S. バッハ：無伴奏ソナタ&パルティータ（全曲）」をAcoustic Reviveよりリリース。東京生まれ。パリでモダン・ヴァイオリンをジェラルド・プーレ、ミュンヘンでバロック・ヴァイオリンをメアリー・ウティガー、ニューヨークのジュリアード・スクールでドロシー・ディレイと川崎雅夫に師事。（KAJIMOTO アーティスト資料より）

室内楽・合唱部門賞



「魔笛」2018年10月公演より 撮影：寺司正彦 提供：新国立劇場

新国立劇場合唱団

New National Theatre Chorus

新国立劇場合唱団は、メンバーを毎年オーディションで選び直すという、歌劇場の専属合唱団としては異例のシステムを採用している。メンバーが固定でないのはやや実験的な側面もあるのだが、創設以来、来日する指揮者、演出家たちからも常に高く評価されてきた。オペラは合唱がなければ成り立たない。当然メンバーは複数の言語をこなし、様々な時代のオペラに柔軟に対応しなければならない。団員個々の努力にも頭が下がるが、団としての高水準の維持には、合唱指揮の三澤洋史、若手の富平恭平の両氏による指導力に負うところも大きい。コンサートでも確かな演奏力を示す彼らが、これからも日本の舞台芸術を支えていってくれることを願う。（河野 典子）

プロフィール

新国立劇場合唱団

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として1997年10月に開場。98年4月から、新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。新国立劇場で上演される多彩なオペラ公演の出演に加え、劇場外からの出演依頼の声に応え外部公演にも出演している。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有し、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は高い評価を得ている。国内主要のオーケストラの他、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、クリーヴランド管弦楽団など国外オーケストラとの共演も果たしている。

オペラ・オーケストラ部門賞



公益財団法人 NHK交響楽団

NHK Symphony Orchestra, Tokyo

サウンドはより透明に、アクションはより俊敏に、表現意志はより明確に。NHK交響楽団は、2015年にパーヴォ・ヤルヴィが首席指揮者に就いて以来、見事な変貌をとげた。北欧音楽など得意レパートリーを取り入れつつ、同氏が同団の根本とみる「ドイツ本流」に配慮した、巧みなプログラミングも功を奏したであろう。こうした状況下、他の指揮者にもより柔軟に反応しており、ヘルベルト・ブロムシュテットのようなまた別の個性が、

今や準首席格の存在である。2018年末にはトーマス・ヘンゲルブロックと初共演し、純モダンでも純ピリオドでもないバッハを披露した。以上のような変化は同団にしても質的に新しく、一つの画期の到来を寿ぎたい。

(船木 篤也)

プロフィール

公益財団法人NHK交響楽団

1926年に新交響楽団として結成され、日本交響楽団の名称を経て、1951年NHK交響楽団と改称。カラヤンなど世界一流の指揮者を次々と招聘し、歴史的な名演を残している。現在、年間54回の定期公演に加え、全国で約120回の演奏活動を実施。また、2013年8月にはザルツブルク音楽祭に初出演、2017年春にベルリン、ウィーンをはじめ、ヨーロッパ主要7都市で公演を行うなど、その活動ぶりと演奏は国際的にも高い評価を得ている。

指揮者陣は、首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィ、名誉音楽監督シャルル・デュトワ、桂冠名誉指揮者ヘルベルト・ブロムシュテット、桂冠指揮者ウラディーミル・アシュケナージ、名誉客演指揮者アンドレ・プレヴィン、正指揮者外山雄三、尾高忠明。

現代音楽部門賞



(C)Kaz Ishikawa

細川俊夫 オペラ「松風」(新国立劇場)

2011年にブリュッセルで初演された「松風」は、同名の能を基にドイツ語でオペラ化された作品で、自然の響き、そして静寂や沈黙を意識しながら、無意識の世界や見えない世界と結び付いた音楽を通じて、独自の世界を切り拓いた傑作である。今回の日本初演は、練り上げられたプロダクションの成果が発揮され、細川俊夫が形づくろうとした作品の全貌を伝えることに成功。舞踊と声楽が一体となったサシャ・ヴァルツの演出をはじめ、充実した歌手陣とオーケストラも見事であった。コンテンポラリー・ダンス、モダン・アートなど、従来のオペラの枠を超えたステージが、多様なジャンルのファンに大きな感銘をもたらした。(満津岡 信育)

プロフィール

細川 俊夫

1955年広島生まれ。1976年から10年間ドイツへ留学。ベルリン芸術大学でユン・イサンに、フライブルク音楽大学でクラウス・フーバーに作曲を師事。1980年にダルムシュタット国際現代音楽夏期講習に参加し、そこで作品を発表してから、国際的に活躍し始めました。以降、ヨーロッパと日本を中心に作曲活動を展開。欧米の主要オーケストラ、音楽祭、オペラ劇場等から委嘱を受け、2011年のモネ劇場委嘱によるオペラ「松風」、2016年、東日本大震災の後の福島をテーマとしたオペラ「海、静かな海」（ハンブルク国立歌劇場委嘱作品）をはじめ、数多くの作品はいずれも大きな注目を集めるとともに、国際的に高い評価を得ています。2001年にドイツ・ベルリンの芸術アカデミー会員に、2012年にドイツ・バイエルン芸術アカデミー会員に選出。2012年に紫綬褒章を受章。作曲・指揮活動のかたわら、現代音楽の紹介と若い作曲家の育成にも力を注いでいます。現在、武生国際音楽祭芸術監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

研究・評論部門賞



写真及びプロフィール いずみホール提供

礪山雅（研究・評論/バッハ研究）

音楽学者・音楽評論家としての礪山雅さんの輝かしい業績については、音楽関係者の誰もが知っている。『マタイ受難曲』（東京書籍、1994年）に代表されるバッハについての著訳書を中心に、バロック音楽やモーツァルト、ワーグナーと幅広い著作、毎日新聞を中心とした懇切な音楽批評は、現代日本の音楽生活にとって多大な貢献となった。国立音楽大学、大阪音楽大学での教育活動、日本音楽学会会長としての学会活動、さらにはいずみホール音楽ディレクターとしての活動も忘れてはならない。昨年2月、不慮の事故がもとで逝去されたが、その多大な功績を歴史に刻むために謹んで2018年度研究・評論部門賞を授与させていただきたい。（樋口 隆一）

プロフィール

礪山 雅（1946-2018）

東京に生まれる。松本深志高校から東京大学に進み、同大文学部と大学院で、美学芸術学を専攻。1982年～84年ミュンヘン大学留学。国立音楽大学教授、招聘教授、大阪音楽大学客員教授を歴任。専攻は音楽美学・西洋音楽史で、とくにバッハ研究で知られる。1988年、「キリスト教音楽研究に対する研究」で第1回辻莊一記念学術奨励金を受賞、1995年『マタイ受難曲』（東京書籍）により第10回京都音楽賞・研究評論部門賞を授与される。他に『バッハ＝魂のエヴァンゲリスト』（東京書籍、講談社学術文庫）、『J. S. バッハ』（講談社現代新書）、『バッハ／カンタータの森を歩む』〈1〉、〈2〉、〈3〉（東京書籍）などの多数の著作、クリストフ・ヴォルフ『モーツァルト 最後の四年』（春秋社）などの訳書がある。2006年～12年日本音楽学会会長、2015年～18年2月芸術学関連学会連合会長、毎日新聞の音楽批評執筆者、NHK「古楽の楽しみ」解説者をつとめた。大阪のいずみホールでは1990年の開館当初より音楽ディレクターであった。2011年度大阪府市民表彰を受賞。2018年2月に逝去。同3月、博士論文『バッハの《ヨハネ受難曲》—その前提、環境、変遷とメッセージ』で国際基督教大学より博士号が授与された。

功労賞



岡山潔（ヴァイオリン）

微かなヴィヴァーレひとつにも深い思慮の跡があり、作品へのひたむきな共感が込められていた。「ヴァイオリン芸人」の自己顕示から最も遠く、純粹音楽というものがあるとすれば、そこに最も近いヴァイオリン。その体現者が、独奏はもとより、室内楽をはじめアンサンブルの活動と育成に心血を注いだ功績は、はかり知れない。「聴く力」が衰えつつある時代においてはなおさらであり、日本の音楽界は今、岡山氏のおかげでどれだけ豊かになっていることだろう。ベートーヴェンハレ管弦楽団（旧西独・ボン）のコンサートマスター時代から、帰国後、晩年まで途切れることなく続いた精力的な活動すべてに対し、満腔の敬意をこめて贈る。

（船木 篤也）

プロフィール

岡山 潔 (ヴァイオリニスト)

東京藝術大学を経て 1968 年同大学大学院修士課程修了。同年ドイツ政府給費生としてハンブルク国立音楽大学に留学、ヴァイオリンを W. ハンケ、室内楽を E. ハウプトマン教授に師事。1970 年ベルリンにてメンデルスゾーン・コンクール「弦楽四重奏の部」第 1 位。同年ブリュッセルのイザイ協会よりイザイ・メダルを授与される。

1971 年から 13 年間、西ドイツのボンでベートーヴェンハレ管弦楽団の第 1 コンサートマスターを務め、ボン弦楽四重奏団のリーダーとしても活躍。ヨーロッパ主要都市でソロ、室内楽の分野で活動をおこなう。1984 年西ドイツ政府から文化面での貢献にたいし一等功労十字章を授与される。

同年帰国。読売日本交響楽団第 1 コンサートマスターとして 1990 年まで 7 年間活躍。1993 年～2006 年エレオノーレ弦楽四重奏団、2008 年より岡山潔弦楽四重奏団を主宰し、ベートーヴェン・シリーズを中心に活動。1990 年より東京藝術大学教授。東京藝大とウィーン音楽演劇大学の共同プロジェクトリーダーとして行なったハイドン弦楽四重奏全曲録音“haydn total”は高い評価を受け、2008 年ウィーン音大に客員教授として招かれる。2011 年非営利活動法人 TAMA 音楽フォーラムを立ち上げて毎月室内楽セミナーをおこない、2013 年より神戸市室内管弦楽団音楽監督、2015 年より札幌六花亭ふきのとうホール音楽監督。この 3 拠点での仕事を最後に、2018 年 10 月没。東京藝術大学名誉教授。

《ポピュラー》

最優秀作品賞



宇多田ヒカル「初恋」

宇多田ヒカル通算7枚目のアルバム。TBS系ドラマ「花のち晴れ～花男Next Season～」のイメージソングになったタイトル曲をはじめ、映画のテーマ曲やCMソングも含まれる。曲想は、聞くとそのハスキーな声は藤圭子を連想させる想いがある。日本語を大切にしながらも、アメリカで鍛えられた音に対するリズム感が低辺に流れる不思議さを感じられる。アーティストとしての評価は“美空ひばりに並ぶ声質の魅力がある”などと、プロのミュージシャンたちのあいだでも高い。昨今、ほんとうに歌の上手い正当派シンガーが少なくなっている日本の音楽界にあって、ロンドン在住とはいえ、その音楽性をもっと見せつけてリードして欲しいと願わずにはいられない。
(池野 徹)

プロフィール

宇多田ヒカル

1983年アメリカ、ニューヨークの生まれ。1998年シングル「Automatic/timewill will tell」がミリオンセラーになり、翌年のアルバム「First Love」が、いきなり765万枚を超えるヒットになって、あっという間に国民的スターとしての評価を得た。国内での歴代アルバム1位というセールス記録は、今も破られていない。豊かな音楽性とともに作詞・作曲・編曲を自身で手がけ、プログラミングも行う。2010年人間活動宣言を行い、活動を一時休止。結婚出産を経て2016年に再始動した。真のシンガーソングライターとして、現在はロンドンを生活の拠点におきながら、日本と行き来して活躍している。

イベント企画賞



内田裕也プロデュース／46th New Years World Rock Festival

内田裕也のロックへの執念を示すロックフェスは、1973年に渋谷パルコで「紅白歌合戦をぶっ飛ばせ」でスタートした。キャロルをはじめ桑名正博、ジョー山中フラワー・トラベリング・バンド、安岡力也、シーナ&ロケッツが参画し、さらに宇崎竜童、ビートたけし、原田芳雄、松田優作、かまやつひろし、RCサクセション、Boowy等が参加。若手も育て、2004年から中国、韓国、台湾、アメリカ、カナダ、イギリス、ロシアでも開催。世界の若手ロッカーにも目を向け、今年46回目を迎えた。内田裕也は車椅子

でステージに立ち、裕也の絞り出す声を満員の観客が合唱して感激のシーンが生まれた。日本におけるロック・ミュージックに、常に一石を投じてる希有な男、内田裕也が存在する。このイベント企画賞が未来への後押しになれば幸いである。
(池野 徹)



プロフィール

内田 裕也

1939年兵庫県西宮市出身。1959年、日劇ウエスタンカーニバルでロック歌手として本格デビュー。66年ビートルズ日本公演に前座で出演。沢田研二等のザ・タイガースをスカウト。70年ジョー山中等のフラワー・トラベリング・バンドをプロデュース。カナダ米国でヒットチャートに登場。映画界でも86年「コミック雑誌なんかいない」でキネマ旬報賞、主演男優賞を獲得。で73年「打倒紅白歌合戦」としてロック・イベントを、渋谷の西武劇場でスタートさせる。以後、浅草国際劇場やロック座を経て、現在は銀座博品館劇場で毎年年末から年始に開催。日本のロックから世界のロックへと関心を高め、2018年までで46回目の開催を迎えた。

新人賞



甲田まひる

何の予備知識もなく聴いたデビュー・アルバム『プランクトン』に衝撃を覚えたというより、彼女のアドリブ・プレイに聴きほれていた。バド・パウエル、セロニアス・モンクのコピー・プレイヤーかと思ったのだが、そのフレッシュな即興性とメロディー・メイクのオリジナリティーに、コピーを超えた才能を感じた。5歳からピアノを始めた彼女だが、有名ミュージシャンに師事するのではなく、母親が図書館で借りてきたCDからジャズの持つ自由な表現方法に魅力をもち、それを“頭の中で歌っているものが出てくるもの”と語る彼女に天才性を感じる。今はバップという形のジャズを演奏しているが、根底に流れる音楽的才能はジャズに限定されたものでなく、天性のリズム感性はポップで、ヒップホップにも通じるものがある。閉鎖的なジャズの世界にこだわらない新しい世代のピアニストとして推薦したい。
(北澤 孝)

プロフィール

甲田まひる (a. k. a. Mappy)

Mappy (マッピー) の名前で14万人を超えるInstagram・フォロワーをもつ17歳のジャズ・ピアニスト。バド・パウエル、セロニアス・モンクに影響され、バップのスタイルで17年に新宿ピットインからライブ活動を開始、18年5月にアルバム『プランクトン』でメジャー・デビューを果たす。ピアニストとしての顔とは別に、おしゃれすぎる中学生として業界の注目を集め、東京コレクションにも招待され、現在もモデル、女優として活躍している。ファッション、アート、ジャズ。そして日本と世界を行き来する21世紀のアンファン・テリブル、ニュー・ジェネレーション・ジャズの出現である。

著作出版物賞



三井徹・著「戦後洋楽ポピュラー史 1945-1975～資料が語る受容熱」(NTT 出版)

欧米文化の流入が途絶えていた戦時下を経て、戦後の日本で洋楽がどのように受け入れられ、広まっていったかを当時の資料を基に浮き彫りにしていく。時代は1945年から1975年までの30年間。根拠となっている資料は各時代の新聞、雑誌に掲載された記事等で、それだけでも膨大な数に上るが、そこから丁寧に、これというものをピック・アップ。折に触れ、洋楽にのめり込んでいった若き頃の筆者の日記も交えながらも、主観を排し俯瞰的な視点で紹介してゆくことで、ジャズから、ラテン、シャンソン、カンツォーネ、ロック、ポップス、R&B、映画音楽まで、時代毎の受容の変遷の様子が説得力をもって伝わってくる。日本の洋楽を語る上で欠かせない1冊となるだろう。
(滝上よう子)

プロフィール

三井 徹

1940年、佐賀市生まれ。上記著書によれば、10代の頃から洋画や洋楽に傾倒、自ら演奏も行っている。アメリカ民俗音楽からカントリー、ブルース、ロック等、幅広いジャンルに精通しており、1960年代に入ってから各種音楽についての研究論文を發表し始め、60年代半ばから手がけた著書、編書、訳書は50冊を超える。(ニュー)ミュージック・マガジンを始めとした専門雑誌や新聞等への寄稿も数多く、1990年に設立された日本ポピュラー音楽学会の初代会長を務めた他、1993年からは国際ポピュラー音楽学会の会長も務めた。ポピュラー音楽研究の第一人者であり、金沢大学名誉教授。

特別賞



外山喜雄・外山恵子

外山喜雄とデキシーセイंटズのリーダーとして、また日本ルイ・アームストロング協会会長もつとめるトランペッター、外山喜雄氏は、妻であるバンジョー奏者、恵子氏とともに半世紀を超える音楽活動を続けてきた。ニューオーリンズ・ジャズに生涯を捧げた活動は、演奏だけでなく、音楽をつうじての社会活動に及び、偉大だったルイ・アームストロングが少年院で音楽に出会ったことに基づいて、“銃の代わりに楽器を”のスローガンのもと、長い間にわたってニューオーリンズ市の子供たちへ楽器の寄贈を継続。その寄贈数は、すでに850点を超えた。ハリケーン・カトリーナの被災時にニューオーリンズ市への支援や、逆に東日本災害時には支援を受ける窓口になるなど、多くの社会的な貢献をおこなってきている。生涯にわたる音楽・文化・社会への貢献に対して敬意を表し、特別賞を贈呈したい。(岡崎 正通)

プロフィール

外山喜雄 恵子

早稲田大学のニューオーリンズ・ジャズクラブで出会い、卒業後に結婚。ルイ・アームストロングにあこがれ1968年移民船に乗りニューオーリンズに渡り5年間のジャズ武者修行。75年に“外山喜雄とデキシーセイंटズ”を結成。国内ライブ、コンサートをはじめ、海外のジャズ祭でも活躍。日本を代表するジャズ・バンドのひとつとして世界的な評価を得ている。音楽面だけでなく、人々に貢献すべく“ルイ・アームストロング協会”の日本支部を94年に設立。『日本のサッチモ』夫妻としてジャズの故郷の人々からも愛され、その活動を評価されてきた。2005年に外務大臣表彰、2018年文部科学大臣表彰を受けている。

《オーディオ》

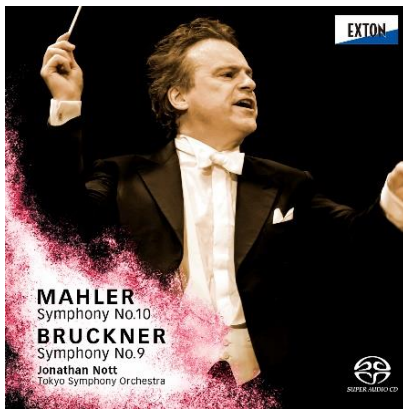
技術開発賞



テクニクスSL-1000R

テクニクスのブランド復活からまもなく5年を迎える。技術力を武器にアンプやスピーカーなど順調にラインナップを拡大し、往年の勢いを取り戻しつつあるが、それにも増してファンが待ち望んでいたのはターンテーブルの復活である。その口火を切ったSL-1200Gに続き、リファレンスグレードのSL-1000Rが満を持して登場。SP-10シリーズで培ったノウハウを継承しつつ、最先端の技術を投入して歴代最高水準のダイレクトドライブ方式ターンテーブルシステムを完成させた。放送局をはじめレコード再生システムの基準機としてSP-10シリーズが活躍していたのは周知の事実で、そのサウンドは多くの音楽ファンの耳に刻み込まれている。原器とも呼ぶべき存在が現代に蘇ったことには深い意義がある。(山之内 正)

優秀録音作品賞



マーラー 交響曲第十番・嬰へ短調（ラッツ校訂版）
ブルックナー交響曲第九番・ニ短調（コールス校訂版）
ジョナサン・ノット指揮 東京交響楽団 エクストン OVCL-00668（国内盤SACD）

ノット指揮・東響によるマーラーとブルックナーの絶筆交響曲の録音は非常に優れている。筆者はサントリー・ホールでの実演に立ち会ったのだが、エネルギーバランスはホールにおけるそれに極めて近似しており、音像定位に関しては実演以上といっても過言ではない。この演奏ではヴァイオリン両翼配置が採られているのだが、第二ヴァイオリンが右側に定位する「ステレオ効果」が演奏への興味を掻き立ててくれる。ノットはこれらの二曲を「完成された音楽」と解釈しているようだ。マーラーではゆったりとしたテンポで耽美調のサウンドを紡ぎだしており、交響曲の第一楽章というよりも、むしろ完結した交響詩のような趣がある。ブルックナーもゆったりとしたテンポで、静謐な美が追及されており、終結部の澄み切ったサウンドは天上界を思わせる。
(石原 俊)

功労賞



菅野沖彦

平成30年10月13日、菅野沖彦さんをご逝去された。かねてから病氣療養中で、ここ数年は、執筆はおろか、評論活動もされていらっしやらなかったため、訃報を聞いても正直実感がなかった。一方で、明確な実感を持った思い出が私にはある。1年半ほど前に奥様を伴ってステレオサウンド社に何年かぶりにお見えになったのだ。同社の原田会長や社長、編集長等も付き添い、編集部や試聴室を覗いていかれたのだが、たまたま製品試聴で居合わせた私は、ご挨拶できたことが嬉しかった。以前のような矍鑠としたお姿ではなかったが、菅野さんが残された評論文や、録音された数々のクラシック、ジャズ作品を通じて、あの毅然として理路整然なセンテンスとサウンドにいつでも浸ることができる。合掌。
(小原 由夫)

プロフィール

菅野 沖彦

1932年東京生まれ。朝日ソノラマ編集長、フリーの録音作家を経て、オーディオラボを創設。1971年、オーディオラボ・レコードを発売開始。その録音作品は、音像の質感とステレオフォニックな音場の融合をはたしたものとして世界的に評価される。一方1950年代半ばより、オーディオに関する文章を雑誌等に寄稿、以後オーディオ評論家として半世紀以上、第一線で活躍してきた。享年86歳。